

諫早市教育委員会議事録
令和 5 年第 1 回（1 月定例）

令和 5 年第 1 回（1 月定例）教育委員会

- 1 日 時 令和 5 年 1 月 2 5 日（水）
1 4 時 0 0 分～1 5 時 0 0 分
- 2 場 所 諫早市役所 8 階 会議室 8－1
- 3 出席者 教育長 石部 邦昭
委 員 原田 裕介
委 員 山口 秀雄
委 員 中野 高子
委 員 小野 靖彦
- 4 会議に出席した事務職員
教育次長 後田 一光
教育総務課長 江頭 大一
学校教育課長 田上 顕二
生涯学習課長 諸岡 昌史
諫早図書館長 石山 雅晴
- 5 議題
議案第 1 号 諫早市立図書館条例施行規則の一部を改正する規則
について

議事録署名人の指名

原田委員と中野委員を議事録署名人に指名

議事録の承認

令和4年第14回（12月定例）教育委員会の議事録について
小野委員から自身の発言について修正の意見あり
一部修正を了承のうえ可決

教育長の報告の要旨

《教育長の報告》

教育委員会の1月の動きについて

初めに、新型コロナウイルスについて、1月20日現在の罹患者を載せているが非常に増えている。インフルエンザも徐々に増えつつあり、同時流行みたいな形になっている。できるだけ少ない数になればと思っていたが、流行というのはまだまだ続くということである。学級閉鎖や学年閉鎖等を行っている学校もある。

感染段階がレベル2-1に引き上げられたが、学校行事や部活動については、感染症対策を強化しながら予定通り実施していく。感染者が増えているけれども、発熱や咳などの症状がある場合には、登校させないということを徹底して3学期乗りきっていきたい。特に、3月は卒業式等も予定されているので、保護者や地域住民、来賓の方々も感染症対策にご協力いただきながら、ご参加いただくという取り扱いでいきたい。

2番目、今年のテーマということで、「挑戦と創造」を昨年掲げているけれども、これを「挑戦と創造×（かける）2＝大躍進」ということで、「×（かける）2」の2は、昨年と今年2年間続けるということだが、2年続けたら必ず躍進するということで行きたいと思っている。

そのためには、やはり3学期がポイントであると思う。3学期というのは、1年間の集大成、まとめの学期なので、浮つくことなく落ち着いた学校生活を送らせながら、1分1秒を大切にしたい授業を行い、学びの質を上げるということを徹底したい。

諫早市の全小中学校が、寒風の中、教室、体育館、運動場において、真剣な子弟同行、文武両道の営みが展開されれば、必ず諫早市は大躍進をすると思っており、本物の教育を推進していきたいというふうに思っているところである。

3番目、新年にあたって4つの柱、昨年と変わってはいないが、「豊かな人間教育」を1番に挙げている。人格を磨くと学力も伸びるということで、最後は精神力、人間性だと思うので、努力を続ける子供たちを育てるということを掲げている。

それから、確かな学力の向上では、主体的、対話的で深い学びということを発信しているので、1人1人が考え学ぶ力というものを授業でも意識して取り組んでほしい。私がいくつか見た授業研究の中では、子供たちに考えるように言うてはいるのだが、傍からヒントをやったり、いろいろな説明をしたり、静かに考えるということが徹底されていない先生がいるので、考えるときは考える、学ぶときは学ぶ、そういう時間の使い方をしてほしいと思っている。このことは全て校長会や副校長・教頭会で伝えている。

そして、ICT教育、GIGA（ギガ）スクールの推進である。デジタル教科書を中心にしながら、授業と家庭で端末を有効に活用したい。デジタルだけの授業ではなく、やはり鉛筆を持って書くことは、紙の効用というものも十分あるので、紙も使いながらデジタルの学びも一緒に合わせて行っていきたいと思っているところである。

また、今年は全小中学校にC4th（シーフォース）を導入したいと思っている。もう導入している市町が多く、諫早市も乗り遅れないようにしたい。これは、非常に便利なものであると聞いているので、働き方改革に直結するのではないかと考えている。

4つの柱の最後、働き方改革、諫早版働き方改革について、学校の働き方改革が進んでいないと、諫早市だけではなく全国的にも指摘されている。なかなかスリム化できないのだが、何でもかんでもやめてしまえばいいというわけではなく、スリム化する中でも私は先生方の教材研究は増やしてもらいたい。しかし、それがまた働き方改革に逆行するようではこの趣旨に合わないのでは何かを削らなければならない、その1つがデジタル化かなと思う。職員会議などでも、1ヶ月に1回されている学校が多いように思うが、諸報告について

は、タブレットを持っているのでペーパーレスで実施するなど、いろいろ工夫をしてもらっている。

さらに、休みの日の公務をできるだけなくして、普段も時間外の公務もなくせるように各学校に工夫してほしいと話をしているところである。ただし、不熱心にならないよう、すべきことはきちんとし、働き方改革もしていくということである。

4 番目、諫早市 P T A 研究大会が教育委員の皆様もご参加いただき、1 月 21 日諫早文化会館で開催された。3 年ぶりの開催ということで、大会テーマは「『つながって守り育てる諫早』～家庭・学校・地域がつながり、子供たちの笑顔を守ろう」ということで、4 つの小・中学校の P T A の研究発表が行われた。また、医療法人カメリア大村共立病院の宮田雄吾先生の記念講演では、家庭教育のあり方や心の持ち方などが語られ、有意義な研究大会であった。

今の教育は、学校だけでは完結できないと私は思っており、P T A の皆さんのご協力、また、地域の皆さんのご協力も得ながら子供たちを伸ばしていく、成長させていく教育をしなければならないというふうに思っており、そういった意味でも P T A の研究大会は良かったと思う。

5 番目、学校改革準備室を昨年立ち上げたが、間もなく 1 年が経とうとしている。狙いとしては、適正規模、適正配置ということで、この後の教育環境をどう整えていくか。これは、市内全小・中学校を対象としているので、俯瞰的、多角的に検討しているところである。視点は、「子供の学びの質の保証、教育の活性化・充実化」である。

いろいろな角度で保護者や地域の代表者等と丁寧な意見交換をしながら、改革の方向性を見定めている段階である。特に喫緊の課題としては、やはり過少規模校であり、過少規模校のところに特に焦点を当てることになると思うのだが、大規模校は大規模校でまたいろいろな問題もはらんでいる。従って、いろいろな角度から研究をしているというところである。

学校改革準備室の中に「諫早眼鏡橋プロジェクト」というものがあるが、これは諫早版小中連携教育と学校改革の第 1 弾で、やはり中 1 ギャップ、小中ギャップと言ってもいいと思うけれども、その解消や、現在不登校の子供が増えており、これは全国的なもので長崎県でも、そして諫早市でも例外ではないので、喫緊の課題として手をつけていこうというものである。

改革準備室でそういった課題に対して小中連携教育、小小連携教育ということで、全体の小中連携というよりも各中学校区での連携

で、例えば中学校が1校あって小学校が3校ぐらい、それをどういうふうに連携を図っていくかということが大事なことではないかと思っている。

特に、小学校6年生から中学校1年生になる際の中1ギャップでは、いろいろと教育体制が変わる中で子供たちが戸惑うということがないように、小学校6年の段階で中学校の学びを経験させたり、また、中学校でも小学校の教育内容を把握しながらスムーズに中学校に入ることができたりするようにと、そういうことを考えていこうというのが「諫早眼鏡橋プロジェクト」であり、現在、熱心に研究をしているところである。以上が報告である。

[委員]

まず1つ目のコロナウイルスについてであるが、今、2類から5類への移行が検討されていると思うけれども、そうなった場合、例えば黙食はどうするのか。また、マスクを教育現場で積極的にさせる方向でいくのか。それとも完全に自主的な取り扱いにして、外さない子は症状がなくても外さないままでずっといくのか。

2つ目は、今年のテーマの3学期のことに関して、私も3学期はどの学年においても大事な学期だと思う。ただ、昨今私が見聞きする範囲だけでも、今ぐらいの時期でも中学3年生が私立の合格を決める子供たちがどうしても出てくるが、公立の受験は3月の頭になる。

その間決まった子はクラスで賑やかになり、決まっていない子は一生懸命勉強していて、同じ教室で収まりがつかない中で勉強しているという状況が昨今増えているというようなことを聞く。現状として中学校ではどのようになっているのか。やはり、そういった中で一生懸命自分の目標に向けて勉強していくのは、少々難しいかと思うので、全国的なものであれば対策を考えていく方がいいのかなと思う。

それと、働き方改革と地域保護者の連携に関してだが、私もやはり働き方改革で教育長がおっしゃられたように、休みの日の公務を減らすことはすごく大切なことだと思う。ただし、PTA研究大会のところでおっしゃられた地域と保護者の協力も大切だと思う。ただし、PTA研究大会もそうだが、どうしても土日であったり、放課後の時間であったり、そのような時間が連携を図るため一緒に活動する時間の主になってきてしまうので、ジレンマがあって難しい課題だなと思う。そこのところをどうやって両立を図っていくのかについて何か案があれば、お伺いしたい。

[教育長]

黙食のことだが、昨日、子供たちとの給食交流会を上山小学校で行った。交流会の狙いとしては、給食の意義や楽しみ、子供たちとの交流を図るということで毎年行っていたのだが、コロナのため久しぶりの開催であった。教育総務課長から説明を。

[教育総務課長]

昨日、上山小学校で3年ぶり給食交流会を行った。3年前のコロナ以前は、教育委員の皆さんや市議会の議長、教育厚生委員の皆さん、そういった方々と教育委員会の我々も参加し、各学校に分かれて訪問していたところを、3年ぶりに規模を縮小して開催した。ウグライナから避難してきている方も一緒に参加され、新聞記事ではそちらの内容に押されていたが、市長と子供たちが給食を通じて触れ合う機会をとという趣旨で、毎年、学校給食週間の期間に開催しているイベントである。

今回については、黙食ということで開催した。食事をする時は黙って食事をして、食事を終えた後にマスクをしていろいろ話をするというような形をとらせていただいた。非常に久しぶりであったけれども、子供たちの様子は非常に明るく、楽しく給食を食べているということがよく分かった。良い行事を行うことができたのではないかと思う。

[教育長]

黙食は、教育委員会から発しているわけではないと思うが、どうなのか。

[学校教育課長]

特に、教育委員会の方から黙食をと言っていないが、感染予防ということでされている。学校規模にもよるけれども、小さい学級や児童生徒が少ないところは、席を少し離して給食を食べているところもあるかと思う。

[教育長]

昨日の給食交流会には委員にもご参加いただいたが、いかがだったか。

[委員]

3年前のコロナ前も参加した。高来中学校に行ったが、その時はコロナ以前だったので、前を向いていた生徒が給食になると班を作って向かい合わせで食べるというかたちだった。ただ、中学校は非常に時間が短かったので、向かい合わせになっているけれども、実際に話しながら食べるということは、実際にはあまりなかったような感じだった。今回、上山小学校に行ったところ、みんな前を向いて一応黙食ということになるけれども、お昼の放送みたいなものを

していて、それを聞きながら食べるということであった。

献立は、赤米ご飯と鮭の塩焼き、ひじきが一緒になっている大豆の味噌煮で、日本の伝統的な食事というような給食であった。好き嫌いもなく、明るく笑顔で食べられていてとても雰囲気よかったなという感じで、余ったものは廊下に行ってじゃんけんをして、勝った子がそれをもらうという形で、全く残らない状況であった。

先ほどウクライナの方の話が出ていたが、多分何のことか分からなかったと思うけれども、ウクライナから来られている方が2人おられて、元英語の先生ということで諫早のALT補助として採用されている。その2人が上山小学校におられるので、その方も一緒に給食交流会に参加されるということで、新聞記者さんが来られていた。

本来は市長と児童の給食交流だったけれども、ウクライナの2人への質問が多く、そちらの内容ばかり新聞に載っていたみたいである。ちなみにウクライナの方に何が好きかって聞いたところ、日本人しか食べないので意外に思ったのだが、ひじきが好きだと言われていた。楽しく過ごすことができた。

[教育長]

子供たちは黙食に慣れている感じがする。もう喋っていいよと言われれば喋るのかも知れないけれども、今は慣れてしまっている。

[委員]

保育園やこども園でも前を向かせて食べさせているところが多い。だから、小学校に上がってもあまり違和感はないのかなと思う。

[教育長]

インフルエンザを含めて新型コロナウイルスについて、どうだろうか。

[委員]

コロナは明らかにピークアウトしているので、次の第9波がいつ起こるかという話で、また3月から4月にかけて大規模な波がおそらく来ると思う。インフルエンザも新学期始まってからほとんど流行っておらず患者数がすごく少ない。某保育園では20人か30人が集団感染したが、そこだけであとはそんなに大きな流行はない。

コロナもインフルエンザも小中学生の患者数は、休みが終わってからおそらく段々減っているはずである。インフルエンザは、みんながマスクをしているということがかなり大きく、小中学校で流行らない。そして、コロナがかなり流行ったので大人の方も気を付けて、繁華街でマスクせずに飲み歩く人たちが少し減ったのではなかろうか。それもあって減ってきたのではないかなと思う。ただし、

重症者が減っていくだけで、必ず次のコロナの波は必ず来るし、インフルエンザもやはり必ず罹る。

以前、諫早市のインフルエンザの統計を3年間取ってみた。いくつか大きなところで学年ごとに集計してもらった。その集計を見ると、3年経つとどこの学校も大体40%から50%ぐらい罹っている。ある年はほとんど罹らないということもあるけれども、どこかの年では罹って、3年ぐらいするとほとんど半分以上が罹ることになる。やはり、罹って免疫を作っているというようなところがあるので、ここまで流行らなければ、どこかで大流行は来るはずである。

マスクをしているので、今年もやっぱり大きな流行にならなかったと思う。次のインフルエンザシーズンでは、かなり大きな流行が来るはずだと思っているが、今度は幸運なことに、多分大きな流行にならないのではないかな。

[委員]

コロナとインフルエンザと同時に感染した子はいるのか。

[委員]

同時感染した子はいる。どのくらい酷いかということは数が少ないからわからないが、インフルエンザに関してはタミフルとかリレンザとか薬があるので、それを飲めば熱は2日ぐらいで下がるし重症化しない。

オミクロンで基礎疾患がない子供が20数人亡くなっている。確かに、死亡者が出てはいるが大多数は症状が軽く、コロナも3日もすれば元気になるし、インフルエンザも診断がついて治療薬を飲ませると3日ぐらいすればみんな元気になる。必ずしも重症化ということではないと思う。

コロナについては、見えない基礎疾患というか、普段どうもないけれどコロナに対する免疫反応がおかしい人は存在しているようなので、そういう人たちが重症化しているのかもしれないがよくわかっていない。免疫系のどこかに異常がある子は、コロナがひどくなりやすいという論文があるみたいなので、そういうことはあるのかもしれないけれどもわからない。

子供のワクチンも2、3月のうちに有効性がかなり落ちる。ただし、発症予防ということからいけば有効性かなり落ちるけれども、死亡を予防するというところからいけば、小学生ぐらいで3分の2程度、70%弱ぐらい予防しているみたいだし、中学生ぐらいたと9割以上予防するというデータが、去年の秋ぐらいの流行のデータだと思うが、外国から出てきている。だから、稀だけど亡くなるとい

うことを考えると、コロナのワクチンを打てば、発症予防はできないけど重症化予防できる。

ちょうどインフルエンザのワクチンと同じで、インフルエンザのワクチンを打っていれば脳腫瘍にならないかということそういうわけでもなく、打っていても脳腫瘍になる人はいるけれど打てば重症化予防できるし、罹ってもすごく症状が軽く発症したと気づかない程度で済む人たちもいるので、それと同じでコロナも予防接種を進めていった方がいいのではないかなと思っている。

[教育長]

次に中学校3年生の話であるが、3学期が大事だというのはまさにそのことである。合格が決まったらもう全てが終わってしまったようで、遊んでいるわけではないけれども、まだ受験を控えている者と合格が決まっている者がおり、別々に教えたり自習させたりということが、一部だと思うがそういう傾向があるということ聞いた。

私は、次の学校に送り込むための実力とマナーをその学校はきちんと教えないといけないと思っている。だから、小学校は中学校に対して、これだけ教えましたので中学校でまた伸ばしてくださいというようなそういうことが大事だと思う。もう勉強しなくていいみたいなことでは大変なことなので、よく高校の先生は中学校に対してもっと勉強させとかないけないとか言うし、中学校の先生は小学校に、小学校の先生は幼稚園にということを時々聞きくので、やはり高校の学びにふさわしい実力をきちんと付けないといけないのではないかな。また、中学校の学びについていけるような小学生を作らなければいけないのではないかなということを、校長会や副校長会、教頭会で話をした。

だから、合格した者こそ一生懸命勉強しないといけないといったようなことや、3学期は本当に大事なので最後の最後まで油断させないで勉強させることが大事であると考えている。

[学校教育課長]

中学に限っていえば、中学校から高校は100%近くが高校進学になるので、私も中学校の教員であるが、3学期の入試は団体戦ということで学級、学年でみんな一緒に一生懸命勉強して、最後まで頑張ろうということで取り組んでいた。

早い子では、1月には合格がわかって行き先がわかる子もいれば、3月の第1週か第2週の公立の試験で、その結果が卒業式の次の日ぐらいにわかるという子もるので、早く決まった子たちは絶対力を抜かずに最後まで一緒に並んで卒業するということを心がけている。

高等学校の方からも課題が出るし、中学校の方でも課題を設定してみんなで最後まで一生懸命学びを続けるように指導している。

[教育長]

校長会等でも言ったので徹底をしてもらえるのではないかなと思っている。働き方改革については説明を。

[学校教育課長]

なかなか難しいところであるが、それぞれの学校、地域で、特色とか地域特性とか保護者の方、教員も違うので、それぞれで工夫しなくてはいけないと思っているが、地域とか保護者とか家庭とかの協力なしには、この働き方改革は進まないの、教育長と相談してその点についてもP T Aとしっかり話をしようということで今進めている。少しずつ一步一步でも前に進めていきたいというふうに考えている。

[委員]

教員の方は、P T Aの問題が結構あるのではないかなと思う。先ほどの研究大会などのときに土日に出席すること意外に、その教員が親としてP T A参画をするということが、基本的には非常に難しいと思っているところだが、P T Aの中にある平等主義がどうしてもその先生を追い込んでしまう。先生といえども親なのだから参加しないといけない、P T Aの役員になってくれとか、そういう問題がやはりあると思う。その辺のところを今後どう考えていけばいいのか。

教員をしている友人がいるのだが、その点をすごく悩んでいた。やはり転勤もあるし、実際に子供のP T Aに参加するのはほぼ不可能に近い。しかし、それをわかってもらえるP T Aならいいのだが、平等主義というものが強く言われるP T Aにおいては、どうしてもその問題が出てくる。先生も参加しないといけない、しかし現実的じゃないというところで、働き方改革のときに、先生に関しては何かしらP T Aの中で免除項目を出さざるを得ないのではないかと、いうところまで来ていると私は思うがいかがか。

[学校教育課長]

今のところ、自分の子供が通っている学校のP T A組織での活動のことで困っているという話はあまり耳に入ってくることはないが、もしかしたら一部の方はそういうふうにして活動されているのかもしれない。学童などでは私も役員になったりするけれども、実際に小中学校のときはある程度は学校の先生ということで、向こうの先生方に配慮されてもらえているのかなと思っているので、今後アンテナを張って、声があれば聞いていきたいと思っている。

[教育長]

この前の研究大会のとき、校長先生や教頭先生方も来られていたけれども、表彰を受けられた先生がその後PTAのジャンパーに着替えて世話をしたりだとか、協力をされていることは私達もわかっており、特に時間外のところで行われるので、そういった面では負担になっているのかなとは思いますが、できるだけボランティアとしてご協力をいただく。しかし、働き方改革は推進していかなければいけないので、非常に悩ましいところである。今からいろいろと知恵をお借りしながら考えていかなければいけないと思っている。

[生涯学習課長]

地域の協力をいかに得ていくかという話であるが、国や県ではコミュニティスクールを積極的に推進していこうとしており、諫早市でも導入が始まっている。そこに地域コーディネーターをはじめとして地域の方が入り、地域総がかりで子供を育てていくために、地域学校協働活動が展開されていくと思う。今後そういったコミュニティスクールがどんどん進んでいけば、学校教育と連携して地域の協力が進んでいくと思うので、生涯学習課としても学校教育課と一緒にそういった体制づくりを進めていきたい。

[委員]

C4th（シーフォース）とは。

[学校教育課長]

完全閉鎖系のインターネットに繋がらないシステムになるが、例えば、学校の諸帳簿であれば、子供の出席、欠席や学校の成績を入れると、それが学校の中の教職員のネットワークに繋がっていて、さらに他の学校ともネットワークで繋がっていて確認できるようなシステムである。だから、通常の仕事もできるし、調査や統計などをそれに入れて保存しておく、ネットワークで繋がっているので合体したり、1冊の冊子にできたり、学校日誌になったりということができるようになり、特に市内で転校した時でも、転校した子供の情報が転校先の学校に行くこともできる非常に便利なシステムである。

[教育長]

働き方改革に資するとはどういうことかという、例えば子供が入学してくると、子供の名前とか住所とかを入れる。そのデータが通知表や内申書の名前、住所の欄に反映される。それから、子供のいろいろな情報を入力しておく、通知表を書く材料になっていくといったような、1回の入力で何回分も使えるみたいなものがC4th（シーフォース）のいいところである。

それから、完全閉鎖性なので、情報が外に出ることはなく、要するに情報が他の一般の人から見られるようなことがない。そういったシステムということになる。学校教育課長は対馬から異動されてきているが、対馬でもシステムが入っていたと思うが、どうだったか。

[教育長]

そういう子供たちの情報、通知書とか以外にも、会議書類とかを作ったらシステムに貼り付けて、それを見ながら会議をするということもできるのでペーパーレスにも繋がるし、非常に便利である。メールについても、各学校の先生にピンポイントですぐ送ることができるので連絡も取りやすかった。

[委員]

それであれば、ここの学校改革準備室などの小中連携のところにも利用ができるということになるのか。

[学校教育課]

まさにその通りである。

[教育長]

今進めているが、来年度、今度の4月から導入される。最初の導入の時は少し先生たちも戸惑われると思うけれども、慣れてくると非常に便利だと思う。いろいろな朝の連絡事項などもそれに貼り付けておくといよい。

それが学校日誌ではないけれど、今日の連絡はこういうことをしたというものが1年間たまっていく。そうすると、昨年どんなことをしていたのかとかいことがすぐ検索ですぐでてくるといような使い方ができることになる。

[委員]

ちなみにこれは県教委でということではなくて、諫早だけということなのか。長崎県全体になるのか。

[学校教育課長]

県が推進していて、県全体にと言っているが全てではなく、ある程度大きなところに入っている。長崎、対馬、諫早、佐世保等が導入している。

[教育長]

将来、全部の市町に入っていくのかなという感じがする。転勤したとしても、全部がそのシステムを導入していると、どこに行っても赴任した日から使えるというものになるので、便利なシステムかなと思う。

[委員]

あと1点、学校改革準備室のことだけれども、小中連携について先ほども話したが、委員も会議の中で何回か言われている幼稚園、保育園と小学校、中学校でも連携することが大事かと思っている。

[教育長]

それについても進めていきたいと思う。

《議題》

議案第1号 諫早市立図書館条例施行規則の一部を改正する規則について

諫早図書館長 説明

質問・意見なし

原案可決

《生涯学習課長の報告》

令和5年 諫早市二十歳の集い 参加者数について

《生涯学習課長の報告に対する質問・意見》

質問・意見なし

その他

教育総務課長

2月定例教育委員会の日程について説明

15時00分閉会